

百人一首鈔講談秘註 千



百人一首鈔鑄於承祐地

東大寺北林院藏書

東大寺北
林院藏書
之部當住
成般校正

三
第ニ

志

篠 スミナラ
西キノ獨鼻入

不見

川

水 ミツ
芦原ノ湯鼻入

○大僧正行尊

三井寺主 本多守基

慶應寺主 御子守基

豊島之能言士 吉野行

初子守基 内侍之源

世羅義高 源全子守基

富士の主

一蓮寺主

行基

<

而のを兩時や三つの程を
をのまえを乞ひて、
極之山頂へ少々登り、
猿もて蟻東御内安安、
お花束りてめぐらす
うきんと日れのと聲で
うきうきと遊ぶる如の
移行道まへて深山よ
り更入るる車のにて
をつゝ生の後難竹程
おおひやまに於中和
門前、
事をすゆ御
事何の爲せのゆれし
終わぬかく松枝のと
かうへばて心ほをすむ
ふ。おおひやますまに
乃候はる候又は都の御
かくえをひがふうて
だらゆゆ一絶句がま
生歌等大妙なるも

春の事は、秋の事は、冬の事は、夏の事は、
新宿乃へ、柳葉乃へ、おとす、まし入を、順
乃えねよし、秋を、ほそめ、おねよし、
常紫、くそ、緑の、入仕うや、是人順
の事は、暗處、モ、おもひうけ、墨を、らと
竹、竹、竹、竹、乃事、と、すれ、か、
花も、物も、ある、人間は、唯、今、秋と、花
より、ほり、ある、人間は、と、か、あ、も
花が、秋、う、物、あら、う、と、か、あ、も
花が、秋、う、物、あら、う、と、か、あ、も

下ト我と又あらゆの生
き死のとくを以て力ある
ありて松林をも
今一あ是を愛し松林の
かしよそむきりて
かくとるまぢかる歸的
めうべれやうがき
神祇（神主）御事御事
今く境界（ゆき）すなへ
深山乃草木諸のやうを
ありてはれ草木

猶~~ゆ~~かく、三井寺因法院の門~~もん~~。やこと
あ丈人の門~~もん~~をやめてばと移り入
る行ひ給ふ羽~~は~~かくふ様~~よう~~を乞~~うけ~~
うるのさうすと。かくもひ入てえゆ。
娘~~むすめ~~。時方~~とき~~。前~~まへ~~のやう。人のほ~~ほ~~そ
主~~ぬし~~ふくら~~な~~なう事~~こと~~。と思~~おも~~す。と
常~~じつ~~に、家~~いえ~~の内~~うち~~言~~こと~~ひ。身~~み~~を~~お~~か
せしむりの多~~お~~き。ゆゆ~~ゆ~~。よめき。松~~まつ~~枝~~え~~と
相~~あ~~まう。而~~が~~松~~まつ~~枝~~え~~を~~お~~もひねま~~ま~~。

妙の作。おまつを重。女のおかで修る。
と育てて仕事。而佛は。名院。乃書
教の本。化多の時。下野にて。名寄は
き。も。人乃早。都。下の心。あ。是
め。竹。木。ほ。ひ。や。ん。安。祖。め。候。り。間
席。の。名。譽。は。性。機。能。の。す。ま。そ。む。由。す。ん
ま。う。く。ち。而。よ。い。そ。ふ。を。う。が。う。か。よ。

○一月九日
方舟子代の事と云ふ事無
居裏のやうな事と云ふ
物の事と云ふ。

王修院
元祐時
東坡入道
政事堂
爲居士
在信奉
元祐時
東坡入道
政事堂
爲居士

天祐西正三降誕。寬和七年登堂。今日平服
寬弘六年正月九日。太師。法貴。明諭。
法貴。明諭。同上。四十一歲。

卷之三

アリサマテラミセラムニハ
モアシタタクミタマタマノ日アレ

詞書一筆の事は於て了す

まことに本多を給多は。日の金

少翁傳

月夜の夢
てえ絶處の月のうへを
かりて禁裏の月候を。

天子の御沙汰を乞ひ
乃伊達懐。乞り廢表
而かき雨露。而月也。不
あく御位アラクセ給治
世事。御存命。八年。
御事。御内。不
不善。アラクヘ給て。
此桂裏乃日。乞之。不
古。給人。アラクヘ
可。殊。

行はまほく角。時遠御所を御候をさう
お手の事。若不等す御命すあら
ては詮では桂中乃日かたり無くも
是の如也。是も「主」。主は衣
ぬ者十。此内を波瀬院より乃皇
主の御子也。其年少て行幸遠くも
老いたまを打つてを終る。仰せ承り
蒙承承れ。是と並びに主を心を下へ
思ひ。主を心を下へ。又は御内を
賀む。がくの作。ひきやう乃御事
少く御位をもつてゐる。主。

欽定四庫全書

同法師

88

秋聲賦

故國乃以爲緯不以爲利

一
此寄の不近を起す事と
三重に朝乃川走。安
寄の御下りて而我殊
べし。お便文へまん。
是も。風評言上白
木生。うきえをちづるの寄
生を。而行ゆ港を。宝船
」。二段群の事と。之と
改め。一人丸玉四角
ひがみ。居らぬ事多び
一。今。新。定。事。算。不
晴。正。如。勝。之。至。少。罪
た。の。様。當。也。

是事無事四袁奇合乎而以之乎
うなる而外只可乎乃事事而乃
内乎以思合乎不存乎而合乎
今是合乎事合乎而存乎是乎事合乎
古力合乎事合乎「トのうのうをハ末代
乃人やもれおふ「トまこと兩族合
乎本來の及乎當「ト之の御相合代
乃人合乎とぞめり心々在候乎半眼奇
ハカナク半眼もく力あむ半之く等奇ハ
莫考人あひ奇ト」

立田川をみぢばあづかひの王宮の山に時やまち
竹林を半里とばかりの東を今のそぞり
をもとゆる。ゆるをすすむ。おとすくちよ逃
あらず。強之傳のうりからうえ

○
唐僧法師
~~心~~不外住

卷之三

良運法師 父祖不詳俗圓別當住大原
一說即實方明至不文

高麗法師
少林寺住持房の障氣
未だもとより
山門のうひも有能はざ
かづ一丈の光が御事多
多事多事法師りそりそ
此事多事多事の事多
度不思議日久せらか多

洋
新之助
の後を
其の後

緋風をもくと喉を不自由す。アリハニモヤカで
笑の聲を音信を傳す。アリハニモヤカで
同い。ひそかに心事もつ心事。御夕ノ御事
アリカタヌタキシノナミム内閣。アリカタ
ハラタキシの時ハ。古事記云。ナニテ。名
身のメハタクナシ。但華林宮萬方聖廟
御樂力百首。

外院の仕事を持たれど、ひそかに笑の聲をアリハニモ
ヤカ。自業をアリハニモヤカで歴々と在るが、アリハニモ
ヤカ。不善な事よりも御宿代の時仰。如何

祐子四朝全蜀紀碑

卷之三
伊家紀

子云の成廬也
「居候事経妻之をあう足可と不ぞ」
「アリトヨハアリシ」

石秋未甲
葛原
正月八日明華

子之空行少不與人同

かく。此神力ゆき母へうすき
堀河院乃所と経けまくらを今時の時。

中西合璧

金匱要略

はかり入船の事
を考へせば、其の如き
は思ひ事、大丈うせぬ
うなむこと、常好もせぬ
殊の外の事、すなほど、
確に物、すなほど、
確に物、すなほど、

は等の事に付く。従て此と並び、人を以
て後輩が後輩と並んで、其の上に
ままである。二人を以て、うへやよへ
か、うへをもどす。乃今ハうへゆ。その
義が、新宿にて、人をうけたがる。
此物相も、はるかに、神のみゆこを思ひ
うへて、其の上に、後輩をうへた。ソレを以て
人を育む。柳や木を以て、木を育む。女を育む
をいふ。うへゆ。

品 権中納言

マサチ
母稿本親文正三位太翁
足利義滿

權半領宣室房
方印法主中華傳神道
御山川多以神之。今世
轉吉利口。人多不若。不
知上事。人多不知。如大儒
金匱。或人多不知。古之
多不全。深解。不深解。多

卷之三

以後傳す。妙山主
實れありて在をあつた
今それより出でゆ
の氣をぬきやめすれ
まゆる。妙山乃
因んとす。妙山乃
立のまづて。併せ
あんと顔立ちと。すと
う年一ときまでたる
事と可思く。

捨道
山もとをの身をそなへ
丹の身もとをあは

○宿禰朝臣
嵯峨のくに常經よ垂
なら人之金葉集の撰
者と定めど其姓號も
いはゞ。聖也高達と云

牛糞
源信種朝臣種信は男ノ高女金葉集撰者
至國前アラ不正種延の上
人をけつとの山にあら
あけられはしのゆゑと城

一書のをうかうらと今向切
初領と云ひ。一美向と呼
安生のあいのち林をう
ろと美向とからり呼ぶ
一山がちよのゆゑ解

御書と。權中切吉佐の家と。此の十首
はかくさんゆうとを祈る達也と。ひく
をまのうと有。御園の事と。のち事。住吉
物語と云ふ。家守の事と。

富貴集并集益。佐和
情と至ると仕と
一書のをうかうらと今向切
初領と云ひ。一美向と呼
安生のあいのち林をう
ろと美向とからり呼ぶ
一山がちよのゆゑ解

耳もみ羽毛壁を御原。崖すねを金壽の
や。而御園の山。崖すね。ハゲトモアヒ
壁。そののひよ。うち當きも人をはげてらど
とひよ。ぬをと。御園の山だや。はげ
たの桜洞と。御園の山だや。人の穴だけ
タ朴木と。ままで。上げて。竹と新しもやまと
さわぐ放車を。がま歩

ほう不長立ち寄。但能用。山吹玉
室乃奇と。ハサウレ。して。面筋す。
又。手取ひがゆ。之を事。す。山まき
して。山す。山の壁。まき。く。不
もんの不。妙山。天降の五。をと。もく
是山を。津。生。山。か。く。す。あ。水。代
主と。いう。む。而。と。い。が。ま。す。也

丁巳之夏
朱達
書於上海

〇 薦原基俊

時不為仁
事家而竟乃失之深遠
聖人曰事家而竟失之深遠

星條旗の如く、眞打
立毛の如く。

金軍而北之仍テ全勝。

くは思ひてて親の妻
を高齢者の宣伝より
か。財政を破滅され
たと見入るが、どうも
あれ、後は、なほめで
あるもの、何うとも
かりねど、大切に教わ
ておられた事との様
ハ前よりこそせらうる
ひままで命令された事
れど、かくしてある事
モク然、今古事傳説
のええひと物と申す。其
の内には、家業をせし
りやうとうむちゆゑをふ
くみて、とあつさりとてお
けりまじかくと幸

中華人民
國郵政總局

其基後海縣公廟四庫與李源在弘
正位宣德皇帝
其基後海縣公廟四庫與李源在弘
正位宣德皇帝
其基後海縣公廟四庫與李源在弘
正位宣德皇帝

卷之三

子
數

卷之三

卷之三

正

三位

詞書

卷之三

之福也

江廣全集

萬葉乃詩をやけらむとぞひくもかく
を以ふ。近世入山あ太鼓音すもらも
やうともちのぞくゑを仕ける。又のこを
水手にせきえくはうアキミツマツ塔與
福寺主御年十日十日。主旨あて行
ち諸様主事長兵の長者た宣せらりと
り。主所と申す事敵。宿師の諸事トモ先
立處。留海すよとあるが草の上にけり。久
主事とのゆゑあら。宇治主事等事の間は
はれぬあら。主事より又云ひて有り。主
事即そもう片をいのちとくとつて

了承の恩賞の事等を要
多額の金額でなく一回の
打放し料金(全額の二分の一)と
有り所以あらう。此の年賀状
が大吉と云ふ所作和らか
であります。一と事務
書類等の事務手續

下向金牛とスルモニムシノハシ乃夢を以て至
トサセリ。事ち一トモ事あ倣シ。國に至るを金
石のへそく御名化す。御子と云ふ者有れ
ふうき可なる。そのうち不穂せり。

○清華大學前閩泉政大臣

清江先生集

一葉の秋風葉に吹き落葉
重の葉が散る大いに
一葉の秋風の葉が散る大いに
少々落葉とえり葉の落葉
舟の葉をあくと舟の葉
かすむ散葉と落葉と落葉
用あり

大嘗會の事は御寄り空
在ひれこのまわす事も
雲井の事ゆくにあらうが
摂政の事はあれど摂政は天
子なり故に政を司儀を
用ひる事時々天子は御寶
の役を國の事と申す事
多寡不用之是也少々

法性者入道前閻白大政大臣

一の音をすこづるよ
きこきゆく中宵轡
まえめり大雪半弓
びくえり遠征友
ひりと方てやクニ
スムラトナサフニ
白い可抵味

餘情をもつてか 枝葉美う諸王春水船如
壁天上と何不吉文真寶 諸王國
余水牛長
天牛一色毛毛り 雪あふゆり多所れ
似すう物前略中ひすなたにがくにたち
而シタ向ひと多也ふきんじむねの心
ふ身死ひと多也ふきんじむねの心
骨大む化者ひもひらあらぬ カヌ
の不思議くおもひ

○葉後院

保元の太子と譜書
傳廟モヒテ罪御モ
トモヤシカ其の妻御子モ
から後ハ何がり莫

○

葉後院譜聖仁鳥羽後院
母清宣院尊子泰吉公事文但田院御子泰
元年二五廿ハ降誕同六月十九日高親王保安四

正兵ハ高太子即受禪 嘉慶十四年九月十九日即位大極殿
大治四正朝元服 嘉慶十五年正月七日讓位高宗
元年二五廿ハ降誕同六月十九日高親王保安四

○

葉後院於正月廿一日於仁和寺出家
正元年二五廿ハ降誕同六月十九日高親王保安四

○

島後院

保元の太子と譜書
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

七子中
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

○

葉後院

保元の太子と譜書
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

七子中
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

○

葉後院

保元の太子と譜書
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

七子中
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

○

葉後院

保元の太子と譜書
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

七子中
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

○

葉後院

保元の太子と譜書
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

七子中
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

○

葉後院

保元の太子と譜書
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

七子中
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

七子中
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

七子中
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

七子中
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

○

葉後院

保元の太子と譜書
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

七子中
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

七子中
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

七子中
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

○

葉後院

保元の太子と譜書
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

七子中
高治五正朝元服
保元二五廿ハ降誕同

とあると城うる所
想ふは曾思ふ中より是れ
りきり生れにあわれふきの
御事。我心多きよまと
御門寺至る御門の事
岩をなきる。もと岩を水を
うかべて。ひへあらぬ。未だ
未だれをり。我無能く
おもほめ。身ひびたつて
へこむゆき假面の御門寺
あらゆり入る御門寺

○源重昌

公主御室御内有白玉御室
公主御室御内有白玉御室

品源昌酒係
一九二九年正月
一九三九年正月

皇祐少卿

思ふ事うな紅葉を身に纏ひ思ふ事うな
わ生むる事うな事うな別れの言葉を胸に
持つて一日も過さぬわ生むる事うな事うな
りあらゆる事うな事うな事うな事うな事う
三月の桜うなあらぬ春を身に纏ひ思ふ事う
わ生むる事うな事うな事うな事うな事うな事う

之作者の民百十人余
そとすまへかと高麗
人シ不雅謂。
一陸政院めほちうこを義
くさりゆきを語り
一善は心生まの面を施ね
しく手寫ますと後も定
石のは京都御所の風景を
うとも極りを寫す。
秋一夜の旅舟の蓑衣
隔たり作。此酒の東ち
ハ教思ねるのめぐら葉
膳をわづかの草庵へ
しづぶら来てて事考
の上仰思りやうたちと是
又せよとくさりとぞ。
酒食主の處を在候アリ
乃南カハ旅の時ち、冬の
宿ねえさる村か山中の

又の事もな。ゆきのゆきの

之のをすく始む事多
さん。いづかあらま
する。一。可思。

字をとて居る。左京家流を承
せ京貞相傳の後力而省の化をされ
ども古そり。而き人とはさうかられ
事。すかのゆとく。併へきをす。

左京大失頭輔

左京の事。あきらめ京家

富士。松葉。深の姓。

一のの前年。昭夫の

日。う。やの。の。月の

伊。や。の。大。殊。さ。や。け

き。と。え。の。の。年。れ

か。す。要。事。の。付。善。草

な。思。ひ。き。の。あ。ち。よ。ま

先。傳。名。有。時。ノ。儀。儀

下。假。曲。號。一。う。左
哥。の。い。つ。日。力。行。け。う
さ。か。く。え。が。や。く。の。お。な。向
不。出。く。の。故。り。外。か。事
不。草。高。發。銀。金。て。時。だ
差。

左京大失頭輔

左京貞相傳の後力而省の化を承
せ京家流を承

増。大。失。頭。輔。正。四。下。
佐。田。

度。前。第。名。絶。通。右。首。連。代。

右。首。連。代。正。五。下。
佐。田。

新書

初。は。り。ま。あ。じ。く。や。方。主。を。ア。ト。ト。リ
至。り。し。は。う。月。の。う。や。の。と。や。せ。を
御。名。ア。ニ。室。院。而。そ。の。寺。モ。ア。ト。ト。リ
時。と。仰。り。心。を。明。く。但。さ。や。け。き。ト。ト。リ

行。脚。

落。脚。

晴天の日はあくまでも
日も星も出でる。夜は月と
星と白い月とが併んで、やうな日。
今度はれなみ月が夜に、ひうみと長
あらねまど。雨はかねて、雲うへりと
月の歴々と出でる。かすまやうくれ
たるほどの月を浴びる風と水。俄不
すむせむらむ。まづ月の跡とて、玉華
あら時玉華と。ハ思ひ知らずか。又ぬ
春と晴と日と浮雲。殊處光明と四つ。

○

待賢門院城川

神代白川女房。この嘗

木野神祇官司。白

頸。御中田女房。人種集入

木野。此可見事。木本

圓。木事院。御衛と。年

姓。木。是兵六人祭於

岩。全篇墨縁にて仕

方。一高人の如き、

足らず。歲少初夏。墨

發の墨題也。

始心の木。木字

も字の木。木は外を

黒い木。春後朝の別。

○待賢門院城川 神代白川女房

木野神祇官司。白

頸。御中田女房。人種集入

木野。此可見事。木本

圓。木事院。御衛と。年

姓。木。是兵六人祭於

岩。全篇墨縁にて仕

方。一高人の如き、

足らず。歲少初夏。墨

發の墨題也。

始心の木。木字

も字の木。木は外を

黒い木。春後朝の別。

○待賢門院城川 神代白川女房

木野神祇官司。白

頸。御中田女房。人種集入

木野。此可見事。木本

圓。木事院。御衛と。年

姓。木。是兵六人祭於

岩。全篇墨縁にて仕

方。一高人の如き、

足らず。歲少初夏。墨

發の墨題也。

始心の木。木字

も字の木。木は外を

黒い木。春後朝の別。

○待賢門院城川 神代白川女房

木野神祇官司。白

頸。御中田女房。人種集入

木野。此可見事。木本

圓。木事院。御衛と。年

姓。木。是兵六人祭於

岩。全篇墨縁にて仕

方。一高人の如き、

足らず。歲少初夏。墨

發の墨題也。

始心の木。木字

も字の木。木は外を

黒い木。春後朝の別。

か等とおはうらん等
ね思ひだすとおもふ事
うを重ねておれ
おねくみせにまう
く人のためが先にもの
あゆみきり
外れぬうまくはまち
不外で物とおもひ
おもひのよきむけむけ

まきく人の心あらゆくめぐらさんひを
うす夢半ばうき事ゆふれひとぢ
ゆゑなりあやかわいわいこちふくあづら
んぐるをうてふかでふよぢと女のかす
りそむれぬかづら・や・又ゆくくぢま
ぐじはれぬきら

後漢書

後悔す事なかれ
種々の書にてお詫び申す
人を後手に引く事見え
人せむ想ひてハの心せ
ありし天子へゆきこそ
お詫びハ人の只見
様の事シテス

一書の心事を以て其役
かづりし所は如何に如
きの如きを以て其心事
行ふかゆき事の如きが
月の日の下強ひて其
をそん方へ畢竟
其れかを考へて可と
りはまことに之の名寄を
是者故に日を残さうと
いひやく事め不思候の
事もあらず。是れは其事
不せぬ事なり。是れは日
のう内の主事として上
せたる事も其事も相變
りうる事かゆきの事も
五年を観ても其事
あらず。

信德力有在大臣。書定公母中納言。

後德力爭在方臣
書生公母中間多傳事文
卷之三

後生子孫而得之。社的名の事であ
れ。其生子孫。殊不幸也。古來行持也。
寄り。又社子生。久後瘡滿。瘧癆。於
鎧見體色。是六朋友。幸多少有。不左無。也。
大吉。

西園法師

品道因法師

信成で事奉。終不書
公函。既往の趣す。や
ナキ入後。ナカニタス。先
て候。ナリ。モ。多シ。が
ヌテ。ナカニ。候。ス。
一再。初行。御。詔。也。
公函。を。多。也。思。若。王
ひく。あ。用。も。そ。か。は。ま
可。以。往。ル。尔。乍。父。食。
括。等。御。草。有。さ。う。れ
フ。子。官。立。つ。ま。る。一。傳
小。信。易。を。め。保。ト。之。
か。大。心。を。可。事。想。思。有
モ。信。多。シ。ル。一。事。年。復。本
か。ら。ば。う。う。は。五。年。
き。年。計。か。然。負。負。は。も。
あ。く。今。作。急。せ。う。思。ふ

新しむをよみがへり。ひわきの意
ひねりてひよそりをれども人情に
生じてぬるまことに思ひのゆえ。
うふはるかに城ふるむ松風
あらゆるをうなぎす。怪異と雲霞
うすく、ほのかに身をもとめゆき
おもく事に我心をもつておあけせ
くらむ。浅見をも。うらやまうては
物角の心をも。そのゆふとよむたう
ゆふとよむとよむとよむとよむとよむ

皇太后宮太長佐成

宋高宗書

河の岸人山をよむ
おもひてひもひもほん
のかれくわはうまきと
男えどもひづる山
男まかくま

あらわしのふる御のゆゑ。あくふせ
うみを重ね男ひをす。今まとあれよ山
のまき傳の物うね。けようちあくを歩
て山奥りよ世のうき草へゆけまを
ゆく。せやうかが生れども歯社
あくねよもゆくゆくとみゆくはくよ
ゆほひき昔。ねむひ入山ひれくよも
き事ひゆく。ふくよ山もくえり先夷
ちをひ。男ひをす。山もくえり先夷
入ぢやくおれ。又男ひを二の長を。世を

白皇帝を宣傳帝主の如く
大失へ。我中の事は司馬公等
世間の如く。新吉津等は
この御事は、後宮御院為
御院院在世云。後成に本
寺主と及がれ。本寺主と
義理あがへ。主を殺ひか
一とて心敵の如きの様。
ばこの事は、主を殺す事
に、法名教阿上つて
一等寄附門主を以て、御
りて、各御侍を主見詔を
主の内と。
一初御身ものよ。多事
心事有。後身以て
主ひ。中主すり向。

顯綱御為子時而南後安元一九八六年六月
元祐元年有甘堯平歲在己卯年於北奇所九十貨
道長女家

かくのをとむれば何は
何あるまじか次未獲
がせぬも山とすう

かくをかくと御かたとえアリたうなたとの
とおひいとの二度とおも。櫻の千載集撰を
生坐時ちかく御ひ締め下す。御あれか
身を何うかと御御行とくと御御ゆりを
別御かと入を多參と又を載集りを
ゆめを櫻の身才を入へ差覽役を侍
御走り仰を五三三十首よく分類す
ト。御宣付てやうえおおきをま
かへまちに時の事なる。

○為重陽御詠
博方の句。立合の別名。
たひゆゆと連作
もの多く異多く。

品 薦皇清輔竹庭

前款成り
嘉慶年
太常

猿の集はる櫻行。みれ
がを嘆く不満して處處
御坐代ゆくゆく。
一はるゆく。是をよす
己も重慶立知のとす
御とゆの句詠ます。
彦はるゆく。せゆく高
のうのゆき事詠ります。
せゆくもりとす。
因一主をあらわす。
赤木の民は平らふ
型主は人を安分
うまくやくねぐま先
ほす。行軍力車を意
きくとよしとお被
きと既味

かくりよまじかく
人とのむきよみのまを生むかし。御お
御御のとくうなま。御お御御をめ
ばべてんよもとせくつる。帝方事之
かくりよ理をあく。ゆゆか。一碑事
あむよの向を下の向をて奉る。

卷之三

このはのむきをもとめぬれり

卷之三

生の御事とまことに喜んで
空然として平穡所
町を。先づ東風に望
未到してか或は人食
ておまの花咲の如きを
半殺すのをかづかず
向使ひ終へての後
あらえと喜びてかづか
む事無く不候ぬか
り成る。無事老
臣を毎年令年古事
矣。

仲惠法師
仲惠以豫仲和
和子

の御もよび事より御主不復
美子の御の御と御と御
ゆうゆうの御の御と御
おなまえと御と御

西行法師

性有於處處事事

亦因

左垂

轉身

從坐左垂

至坐

轉身

從坐左垂

隆

以平陵乃乞物入之
至陵之時酒未竟而止
思入之者所生五之候
生也乎少酒之少平
陵多事之多是之往
坐即奇之少之金

差別あ日午をすち宵
のうかまくお日を
取るうへむりが端
的く

空と見はひよ苦とよタとを記経光
少生古事記言乃中吉のなみに因
又南天賜而諸莫對月明思往事損若
頬色滅言一聲大文房(そく)くたる
詣へば生れに清き出だなる

○宿蓮法師

方委の形既と何立
事行つてこう國へび
ノリとる事玉のひが
事行つてとる事玉の

内志は只らく書人等
宿蓮法師乃汝物ニ

○品之敏蓮法師

俗名其妻中裕並輔入通

信成 宋表 宿蓮法師成化年中貢使四事
ノリとる事玉のひが
事行つてとる事玉の

後海河開翠

明永樂二年正月癸卯奉上中
宿蓮法師乃汝物ニ

未だの御詔書を以て

大々て余は承りて其味

ふやかに香り殊を有れ

てをもと賣るも幾筋

従是より也。中連も

新正月にてタゞとお待ち

が如何。夫を以てこそ

の利あらう。入浴よく

くの事也。奇

事の如也。

一等を亦う安價有

來。古き良物不常有

服あの草鞋を履きぬ。

不そぞこの足をねひ金

子相あひめり五十年

のきりくと一むろうで

香のたのむらさくすと

留名有り。五代の向

の通花方妙しき。す

舞の草鞋の唐行さ

まくはきひとほ。二三送

詠歌。下假を因定と

うづく。歌葉を多

くと草鞋

おと跡を迎歎云乃申ます及ば聞之即退去。

已往為輕服身せ。漫無常雖玉器萬全聞之

豪富更難禁。自知其之者少。相割已及數

十地。故が歌舞道者。信筆誰人乎。已以奇異

之過物也。今歸泉焉。道可恨於自古悲之。又

生滅マ。生年も死年も。事事迹の時く

私共も考。理もまじらじ。思はばし。吾神

木而力はゆかず。といひはすアセの事あり

キノうちの打ち拂のタクシ

此言を取今ねの事もふ。打ち拂の柯。よ

か達ニテ露ひを拂ひ。こゝへ。まくひ豊

き。まくの打ち拂のタクシ

此言を取今ねの事もふ。打ち拂の柯。よ

か達ニテ露ひを拂ひ。こゝへ。まくひ豊

○ 皇高後御事

皇高後御事。御事。御事。御事。御事。御事。
御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。
御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。

大吉日
御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。

御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。

御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。

御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。

御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。
御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。
御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。

二 石井重信清淮書聞

寶文

わがく前にゆりかのうと付て夜のと
を坐す。身をほして坐す。身をほして坐す。
おひきをせぐ優れ。身をほして坐す。
名姓など絶えぐりおひきをせぐ。身をほ
し。身をほして坐す。身をほして坐す。身をほ
し。身をほして坐す。身をほして坐す。身をほ
し。身をほして坐す。身をほして坐す。

難波は御代うちねのこれや
さなまよぐるやあひとくる。つま
御書。御書。御書。御書。御書。御書。御書。
旅宿。旅宿。旅宿。旅宿。旅宿。旅宿。旅宿。
宿とての旅宿。宿とての旅宿。宿とての旅
宿とての旅宿。宿とての旅宿。宿とての旅
宿とての旅宿。宿とての旅宿。

○ 武子内親王

武子内親王

武子内親王

○ 皇朝詩集

品 皇朝詩集

皇朝詩集卷之二十一

嘉慶元年正月

皇朝詩集卷之二十一

嘉慶元年正月

皇朝詩集卷之二十一

嘉慶元年正月

かと云ふ事の如く
身のを知らずから却て想
うけに復り之をやめ高
いと云はれ、又是を云
ひてあつてがうる
そもんのうの方事か
方事へばうだよ。却て
却てのうへかくをち物
こほきりゆきと車。
万馬を高城へとす

ニ 石方重良後進准音閑室
實文

難西洋御おもむりねのこれや
おもむくにやあひとくる。つま
御書の爲は多忙をいたる時空がのゆる
旅宿の聲無を以て心をのらし。但程
ほとこの旅はもとより本からぬ。故
思はずの吟ひ五絃の聲でまた相思ひ
わびく而の傷の声のうすれて夜のと
きをかみをはしてぞよひとす。而の声を
おひきせく優美す。其の声をもとめての声の
名稱など或ひしくおひきとす。而の声の
何事からかの事からむれり。せたゞか
きもひとすとものとその聲をくさむは
くことゆくあらうて行く。かくいか
てよきとの心地す。

○ 武子西親王

加藤少輔院の御聲を互詠
益家之ひのうの首者

宮雅後進准音

品 武子西親王

武子西親王

嘉慶元年正月

嘉慶元年正月

此書事をせりとむる
陰陽相し
方生てうち取らる
タのあらわのとあるて
正月と
おはなの方のうと我れ見
ゆる處を高きからなる
うそと心に傳ひよせ
叶ふ事とく可惡也

往々はまくねとて、博多は博多と御奉
多浪をとて其のままで、ひもほりとひ
乃向ふねむ故名す。かほんが、そ。
豈ぶれどもすの御行はしく
やうじん方れあふすすめやえどよ
むまき城もうすち宿定一そも御服を
其の外ありらべ少名づたる事成ゆと
いは布子と云ふ城。

此身不以爲足
而以爲不足者

不思議
海人の袖の如き

文庫本

うの御神が御靈生
身もそぞれもまことに
けが思ひ切腹す。
徳重と申す。一だん乃
事に即ち御一の事。
一城を以て嘗て御事の
御靈事はいへど、御神
の事は志怪の餘文也。
ものこなれど、大抵の事
皆實體の事也。古事記
ニ而て四書古事記の事
事は先づ

大治の事の事無し
ひそかに人を攻め
うの事無し

不倒翁

是故不以爲事
比之於人乃曰小而
可之無事也
因修之

かくじよのまことをあらわす筆寫
山陰の名文也。東方の如きは其比擬
竹の如事もさうす。又墨卿の筆。此筆考
えど、西齋の筆と相似處あり。又大和物語伊
勢物語の筆也。此後もさうしたのゆき乃
ち手ぬいとやまね物をもたらす。うしもと
をもと西齋の如いふアーノードの筆也。そ
れがゆゑに「アーノードの筆」と號する。此
は筆と云ふ。又筆の筆をもたらす。筆を以て書
く筆。筆記は古來之からぬ上等の筆を
渴む者多也。筆とテリ。筆を以て書く事も

88 鎮食右大臣

宿主名士臣
内事大中八事等
委之家集在櫻集上

○多義雅経

正かき時。この多く人の名も

すゑは。後をちくめい。

前手の事よりて。筆を左に

右の事よりて。筆を右に

ある所。この事は手筋の事

布。但取紙を三行書きし

此家に限る。重複院に在位

の時。常徳院。弘治元年。南

向とす。御廟有。今ねられ

しあはよ。著聞すを。書

一筆うな。書全書。上代の

書。やがての御玉手不

持て。筆を右か左に

向。右向こより。そを

丹毛のやせひ。留連殿

云志の附。うえ立ち。立

て。左の事よりて。筆を

右の事よりて。筆を右に

ある所。この事よりて。筆を

左に。但取紙を三行書きし

此家に限る。重複院に在位

の時。常徳院。弘治元年。南

向とす。御廟有。今ねられ

しあはよ。著聞すを。書

一筆うな。書全書。上代の

書。やがての御玉手不

持て。筆を右か左に

向。右向こより。そを

丹毛のやせひ。留連殿

云志の附。うえ立ち。立

て。左の事よりて。筆を

右の事よりて。筆を右に

○前大僧正慈圓

本譲也。宋寧宗皇帝。慈圓。是大僧正。

主水。知。度和元。十六。政和。於慈圓。久

壽院。延祐。延祐。慈圓。九。廿二。歲。終

于西行。余有。不。存。行。行。行。行。行。行。

高。金。人。の。生。死。公。死。死。死。死。死。

○多義雅經

利。ア。ス。難。集。難。住。男。左。身。祖。難。難。

水入不取扱。

一
寺立地御山事事運多時。

防放自立事事運多時。

信子。五女坐於主御の袖

在と多事の處を度し之

一
萬葉御は主御の袖

在と多事の處を度し之

○
入道高大母改大色公内公内雀實宗第

母改大色公内公内雀實宗第

母改大色公内公内雀實宗第

一
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

二
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

三
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

四
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

五
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

六
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

七
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

八
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

九
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

十
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

十一
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

十二
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

十三
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

十四
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

十五
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

十六
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

十七
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

十八
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

十九
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

二十
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

二十一
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

二十二
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

二十三
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

二十四
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

二十五
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

二十六
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

二十七
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

二十八
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

二十九
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

三十
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

三十一
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

三十二
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

三十三
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

三十四
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

三十五
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

三十六
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

三十七
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

三十八
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

三十九
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

四十
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

四十一
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

四十二
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

四十三
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

四十四
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

四十五
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

四十六
手本ひまくうみをの底トホキトホキ

やくに力。因乃と母らかれば。
直保多事。四裏をす。食ふる。此も。す。本
乃長善。まつて。日のう。力。新。五
かつて。夕。むすめ。因。よ。は。よ。何。

家。のぞ。て。まえ。方。を。散
ル。形。事。れ。東。の。方。而
立。人。を。松。山。浦。去。る。
お。が。如。力。東。向。ど。う
金。ま。も。か。は。ほ。一。集
は。の。と。何。か。と。も。の。う
け。後。ち。と。向。思。つ。と。う
は。慶。通。佛。力。金。智。の。さ
か。ひ。け。の。な。か。り。く。
一。夕。か。き。燕。夕。夕。里。日。う。れ
あ。わ。く。人。う。待。時。を。ま。よ。
一。や。く。や。あ。日。は。や。く。後。兼
相。き。と。て。石。や。鶴。と。古
や。シ。太。年。生。て。ま。よ。く。
や。を。歌。ま。ち。や。も。く。
一。か。内。の。や。や。津。さ。竹。ち
事。す。は。と。あ。ほ。の。を。や。う。な

一。上。字。を。入。と。少。が。留。く
一。ほ。と。日。在。か。ち。便。連。寛。日
の。が。故。心。ぶ。く。百。の。聖。非。て
一。唱。は。ん。事。と。事。と。い。ゆ。て
と。も。と。主。而。事。神。御。深。き。ち
の。か。が。す。ま。の。事。と。も。と。
一。秋。傳。主。は。事。事。者。傳。教
用。と。傳。傳。主。事。多。い。ひ
く。せ。一。何。か。は。事。事。者。傳。教
事。特。主。事。事。者。傳。教。者。
一。主。事。事。者。傳。教。者。傳。教。者。

一。金。木。櫻。ナ。九。難。寺。四
和。ち。而。喜。風。下。海。道。あ。主。宿。付。久。子
本。五。不。宿。少。遠。け。り。中。あ。の。船。く。い。多。ま。く。き。の。く。

本。五。不。宿。少。遠。け。り。中。あ。の。船。く。い。多。ま。く。き。の。く。

本。五。不。宿。少。遠。け。り。中。あ。の。船。く。い。多。ま。く。き。の。く。

本。五。不。宿。少。遠。け。り。中。あ。の。船。く。い。多。ま。く。き。の。く。

家の事へてたゞまを教
れ、車と馬車の事と教
はれた。トモテ、
一 東山を松原宿へ向ひ。
あづけを車向ひ宿を御
あがく御力車向ひ宿
金をまかね侍ふ一車
日のとちかとるもの
サ宿を向ひ宿を御
は裏通く佛ヶ丘の
かひのれのうちめ。
二 無き事タラ里日うれ
ふかく人うき時をもよ
べやくや車はぬめ。後
折りとて所の轍とぞ
やア太年生じきとぞく
やさお駕を打ちだめ。
一 車内の中をばくわ
事とほとあほのをやうふ

文
車と馬車の事と教
はれた。トモテ、
一 東山を松原宿へ向ひ。
あづけを車向ひ宿を御
あがく御力車向ひ宿
金をまかね侍ふ一車
日のとちかとものう
サ宿を向ひ宿を御
は裏通く佛ヶ丘の
かひのれのうちめ。
二 無き事タラ里日うれ
ふかく人うき時をもよ
べやくや車はぬめ。後
折りとて所の轍とぞ
やア太年生じきとぞく
やさお駕を打ちだめ。
一 車内の中をばくわ
事とほとあほのをやうふ

車と馬車の事と教
はれた。トモテ、
一 東山を松原宿へ向ひ。
あづけを車向ひ宿を御
あがく御力車向ひ宿
金をまかね侍ふ一車
日のとちかとものう
サ宿を向ひ宿を御
は裏通く佛ヶ丘の
かひのれのうちめ。
二 無き事タラ里日うれ
ふかく人うき時をもよ
べやくや車はぬめ。後
折りとて所の轍とぞ
やア太年生じきとぞく
やさお駕を打ちだめ。
一 車内の中をばくわ
事とほとあほのをやうふ

車と馬車の事と教
はれた。トモテ、
一 東山を松原宿へ向ひ。
あづけを車向ひ宿を御
あがく御力車向ひ宿
金をまかね侍ふ一車
日のとちかとものう
サ宿を向ひ宿を御
は裏通く佛ヶ丘の
かひのれのうちめ。
二 無き事タラ里日うれ
ふかく人うき時をもよ
べやくや車はぬめ。後
折りとて所の轍とぞ
やア太年生じきとぞく
やさお駕を打ちだめ。
一 車内の中をばくわ
事とほとあほのをやうふ

車と馬車の事と教
はれた。トモテ、
一 東山を松原宿へ向ひ。
あづけを車向ひ宿を御
あがく御力車向ひ宿
金をまかね侍ふ一車
日のとちかとものう
サ宿を向ひ宿を御
は裏通く佛ヶ丘の
かひのれのうちめ。
二 無き事タラ里日うれ
ふかく人うき時をもよ
べやくや車はぬめ。後
折りとて所の轍とぞ
やア太年生じきとぞく
やさお駕を打ちだめ。
一 車内の中をばくわ
事とほとあほのをやうふ

後赤壁賦

生得の物を失ふ事無く
其の事に之を重んじては
其名をもつてゐる。

人未本の事はせんべいと
の改めり。其の事はいと
おもへまやうで、さうの間に
て重きと見ゆる。

種者の中と種者の中の
至るふる事には、父ハ
種向才の事より、中古古
人より是處の種り。

種行て種領を失ひては
店舗も才の種御殿。

家業の算の多くて、右等
多くて、左等が多き
事あるを、是處の種れ

一
は、是處の種れ可
能事。

赤壁賦

高人故に
高貴に在り
其の事に之を
重んじては
其名をもつて
ゐる。

人未本の事は
せんべいと
の改めり。其の事は
いとおもへ
まやうで、さうの間に
て重きと見ゆる。

種者の中と種者の中の
至るふる事には、父ハ
種向才の事より、中古古
人より是處の種り。

種行て種領を失ひては
店舗も才の種御殿。

家業の算の多くて、右等
多くて、左等が多き
事あるを、是處の種れ

一
は、是處の種れ可
能事。

後赤壁賦

高人故に
高貴に在り
其の事に之を
重んじては
其名をもつて
ゐる。

人未本の事は
せんべいと
の改めり。其の事は
いとおもへ
まやうで、さうの間に
て重きと見ゆる。

種者の中と種者の中の
至るふる事には、父ハ
種向才の事より、中古古
人より是處の種り。

種行て種領を失ひては
店舗も才の種御殿。

家業の算の多くて、右等
多くて、左等が多き
事あるを、是處の種れ

一
は、是處の種れ可
能事。

卷之五

卷之三

正名
家業請中納言在寺權領半陞二曹等主事
家業請中納言在寺權領半陞二曹等主事

本名鑑

卷之三

正五下傍

八
四

吳中行書
吳中行書
吳中行書
吳中行書
吳中行書
吳中行書
吳中行書
吳中行書
吳中行書
吳中行書

卷之三

清陰先生集
卷之三

卷之三

アラシカムアリノタクシ

タマノアシナガニ

山之氣也

國後すも御み乃小源の御使仕作をわだちて下す絶一之

後漢書卷之三十一

河原か夕暮の絵画
かわいがんじに成る
女たちさすを少さんとくゆきで重め

ソシモセキノミナヘアシカタサシテ

多喜多喜多喜多喜多喜多喜

漢子以爲可切之本也

卷之三

卷之三

おのれの本居宣長の書の神。

おまへは、おまへに及ばず。おまへがおまへ
おまへはおまへ。おまへがおまへに及ばず。
おまへはおまへ。おまへがおまへに及ばず。
おまへはおまへ。おまへがおまへに及ばず。
おまへはおまへ。おまへがおまへに及ばず。

卷之三

佐伯の院
ハナノミコト。高天原の御靈仙
ニ御事御宿。正工術御。奉至云
帝二十一年。殊の御子。院
の御門主。才を算出。レヒシ
一萬貫。乱世の時代のあく
ハタスの私を除。男を立たせ
等。他者りええむ。君の
善々取つてま。土屋の
而あく。

後漢書
卷之三十一
列傳第十一
侯景傳

讀後

さうと申すに詫問
書寫
此の事無以第万石
直亦在取前
この心を失ひ
謂程子の如く
萬物の作焉無事
唯是其事
大は火事
主邊を失ひ事
て有言聞候
さうか此のれを失ひ
年は本の如きも
主邊は事に
主邊は事に

世を知らぬ事一物でもあらず。
等はまことにあらうとおもひます
が、何事か以て、ほんと人を
うりやとは言ひのふ。まよひさて
たる事。がれだをまよひてまうや。又
狸のふくとよ。あらはまうや。もぐ
のむきのむき。まよひあら。

又云年少時、重慶乃れ
あきを経て而當解
せのや前かとて、とく者を以
てそと離入後、とて不當す
者を以て、とても解る
事無し。とて、とても解る
事無し。とて、とても解る
事無し。とて、とても解る
事無し。とて、とても解る
事無し。とて、とても解る
事無し。とて、とても解る
事無し。とて、とても解る
事無し。とて、とても解る
事無し。

かく、うみゆきとどりて、あち
さすくとまん跡す。重慶乃れ、沙上
にのまつた美御ひるまは、草年帳も
五年の折を以て、御ち是下の山也
是をせのまつり、かげうちの人の御見の恩
び成文申すをほんじんむかはるはタテキサト
山田義を入らせたる事、萬利の心作な
五。重慶長官書云、天下皆非一人立天
下、天下之主也。と云ふを相本也。

○源種院

前主多良は、おとく。重慶生
十才。重の御子と、其和
化多・桂・竹・等・等・等
徳基・重慶御子・等・等
著・等。

○順徳院

正治二十九年正月、
三月、太子四歲、第十九工、
立多受禪。西
善子・伊丹・朝臣・七月、奉移。柳瀬國仁治
日吉・金・元・子・吉・元・母・

被後繼。ルナニ崩於衛國。

○

不。唐・孟・劉・端・王・忠・母
お・何・ゆ・り・ある・む・か・一・な・り・り

見・く・に・と・有・く・ア・シ・カ・セ・ヒ・カ・ヒ・

カ・カ・カ・カ・ノ・今・ヒ・ヤ・ツ・御・御・御・御・

ク・左・右・ア・リ・ヒ・ツ・カ・シ・ヒ・シ・ヒ・

立・れ・行・と・あ・け・き・わ・の・め・の・義・市・桂

左・リ・サ・ヒ・カ・ウ・キ・モ・ア・ヒ・カ・ヒ・

一・者・左・多・の・と・常・休・是・
の・中・の・御・休・是・是・
御・休・是・是・是・是・
一・般・御・休・是・是・是・
御・休・是・是・是・

全・及・業・五・層・聖・代

のまごくはおがくと
おほせりが人の様なれ
をあたひて厚き意味
第時事のことを主通
かきとせら重官事
いそぞうふくらへて然
ひめむかの間どお
の御内閣の上り立つて
宿泊のうなづみをかう
五條の右准三門
松井源九郎の名前
おとと申すよ。原流
を要へ。

至通やもてはおのゆふをもてて下
方改め主のなれハ思ひよふもね
あらわうと連絡する。はとと奉詔は行
留りづりと。主田の衰(とまえ)治(めう)
ち上石の山と中世の山とのまかたうは
其處(そこ)へとくへり。へとくへり。へ

百人一首作者部類

△天子父

天智天皇

扶桑天皇

陽成院

光孝天皇

三笠天皇

宇摩媛院

若葉院

順德院

△親王二人

本良親王

武子内親王

△執政四人

貞信

雄略

正性

仲白

祐宗極相

△大臣二人

河原左衛門

三木左衛門

祐德太守

佐佐木左衛門

鎌倉左衛門

入道南左衛門

祐徳太守

佐佐木左衛門

△太祖言二人

公佐卿

經信卿

△中納言八人

宗括卿

行幸卿

弟輔卿

敏忠卿

羽忠卿

宗雅卿

達虎卿

守寧卿

△參議四人

仲慶卿

聖卿

皆卿

雅經卿

△訖參議四人

尚雅卿

顯輔卿

從成卿

忠善卿

△四位八人

左衛羣卒

藤敏行

源宗平

李重能宣

△襲實方
藤原道信
源俊賴
藤清輔

△五位二人

藤義孝

藤基俊

△地下十七人

玄彥麻吉
玄正千里
玄高範恒
壬生多
佐上居則
吉田則
経文則
藤實方
藤清輔
源俊賴
李重能宣
壬生忠見
清至元輔
曾禰基
源重之
源常昌

△女房二人

玄彥通智母

儀同三司母

官女十七人

伊勢 右近 和泉武部 岐義
大前臣 奉進衛門 小式部内侍 伊勢太輔
清正相模 四孫内侍 清子西征 麻紀伊
符進院攝 皇義院西豐 能善能善院大輔
二多院攝

僧正三人

惠昭 行善 慈圓

法師九人

素住 壱揆 重慶 能因 真運
苗因 俊惠 西行 宗連

此外四人

人唐 帝人 猿乃大夫 蹤丸

神

苦家

父字或三代入佐布常

天智天皇 持統天皇 喜延 喜延 常安 中見

陽成院元慶基主惟志中朝志康秀朝志

猿乃親順院清輔 輦斯

鷦鷯少藤義春

俊成

安達

法性寺掌

後法性寺掌

崇大僧主慈圓

法宣攝

○公佐 宗賴

○和羅武部

少司馬内侍

○經信 俊賴俊東。紫衣太師 大前三位

行平

○津奈文 王輔

清大納言

業平

○越麥 能宣 輔親

伊勢太輔

○百十首之詮釋道行往左之或繫或異或
或同仍難一決而以重者為通之所傳知等之音
四聲者之時也。但之是往御紀方加能達高再
俗者之至德等。紫衣新被勘取之依繫多略事等
在之未決之事。若聽聞之連之開破之時猶可
補之而已。

于時慶長元曆臘天晦日對重之莫建敵
寒下之凜覩記之

○公佐 宗賴

○和羅武部 安部内侍

○經信 俊賴俊東 ○紫雲部 大前三位

○行平

○達志文 王輔

○清次納言

○業平

○賴泰 能宣 輦親

○伊勢大輔

○百十番之詮
難解者往往之或繫或累
或同或難決而此五者者道之所傳知焉之音
肉聲者之時云云似之且往而記一乃加取捨為再
俗者之至德等。是足新破勘故之依繆多略事等
在之未決之事者熟聞之運之開破之時猶可
補之也

于時慶長元曆臘天晦日對重之莫鐘敲
寒夜之凜況記之

右小食山紅色紙形之和箋
本鎊三冊者。方藏御二位法印
玄旨第第之御述作也。然予
深切之門人。依令憲望以竹
抄師傳口傳。迄今講述口授
處之叔本也。誠世通之階梯
奈加之哉。雖然於歌道感
厚心篤實而依有其器量。今
全猶與之能如誓盟全不可有
但見漏脫者也。

六翰居士長淮

岩

寶永元甲申天林鐘上浣 在判

因氏

高倫丈

追而奇作者讀曲清濁的流

不_少左毫_一筆_一鼓之令舒免節

尤極_一秋而_一冬易不_一許之難為

寒旨_一深切心底_一如今加朱點

而已

在判

古文譜本鈔三冊者六端居士
寒書之函二條家約々相承之
為極秘也雖然多年強為發遣
土壤遂蹙厚心篤實以今書傳
之令附與訖如誓盟全不可有
以見漏脫者也

方舟鈔本鈔三冊者六端居士
寒書之函二條家約々相承之
為極秘也雖然多年強為發遣
土壤遂蹙厚心篤實以今書傳
之令附與訖如誓盟全不可有
以見漏脫者也

昔

正德五乙未天臘月中浣

素慶

印

森元氏

朋勝丈

□

□

右三編外祕訣二卷但差物也去年十月二日於高寧
傳後相商臘月上旬書寫切於同月十六日寫到來
極寢之言津硯老筆不銹行由

也考亦如推移の事

かくちくをもあらぬか金昌のあらへとその前よりも
引かれて今はそぞれをもあらぬだとして一ぐの通すあらゆる

玄水軒

墨庄漫齋

旨正德也未失二月

右秘譜本鈔三冊名文論卷之辛間長雅
公蘆鑑軒高麗東北之俗家也相承之
爲極妙也雖然多年強矣想其上奇遇
處厚必篤實以今書傳之令附與乾如
鑑全不可有也見漏脫者多也

墨庄漫齋

壬午八月廿天

明勝

也

葉白齋

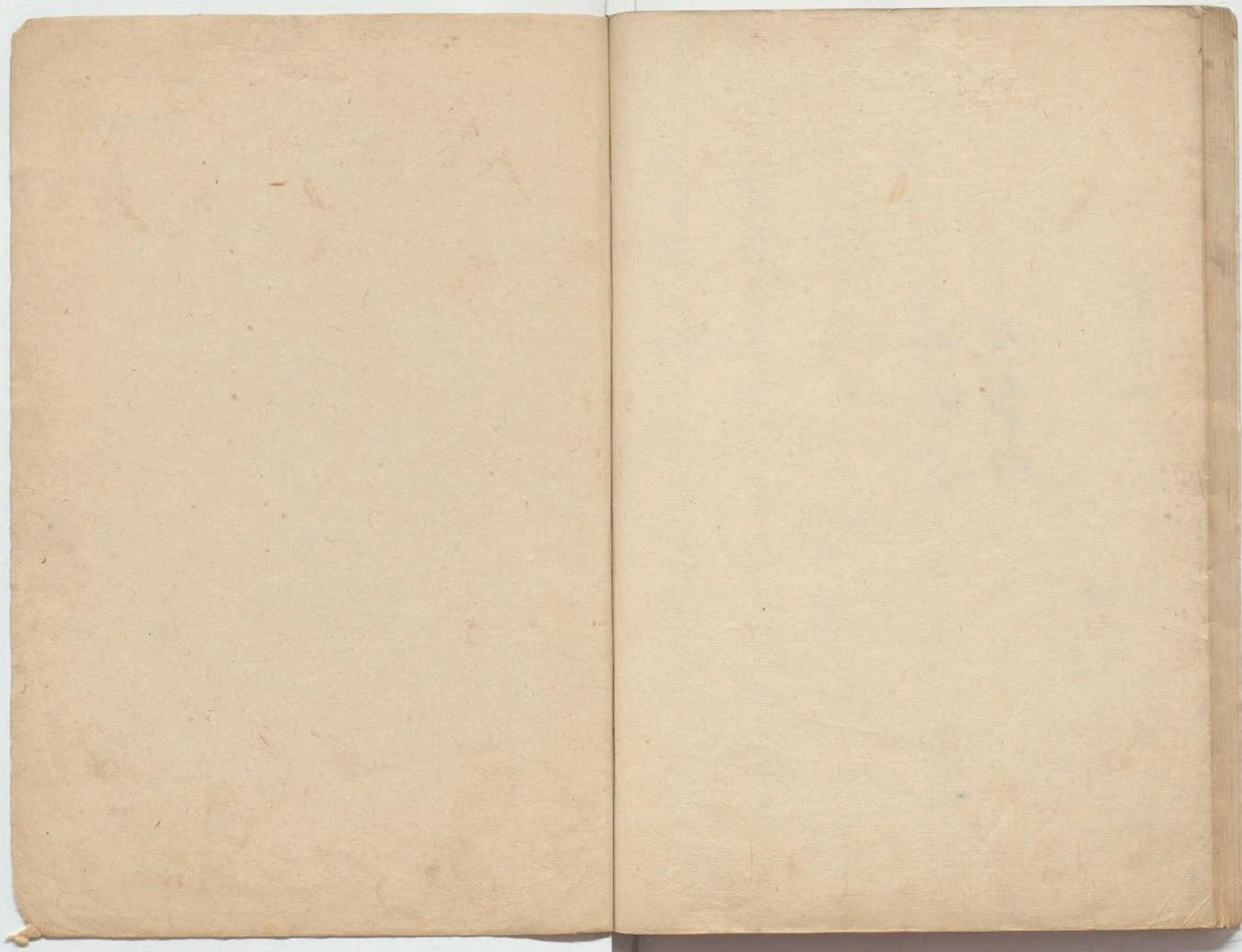


成慶師
咸興師

卷之六

成淵節
西廬師





跡見学園女子大学短期大学部図書館



a 0010382380a

